

「Q-U」について

平成21年4月27日

保護者 様

佐賀市立東与賀中学校

平成21年度より、「Q-U」心理テストを実施することになりました。つきましては、保護者の皆様に本取り組みに対するご理解とご協力をいただきたいと考え、「Q-U」心理テストに関する資料を各ご家庭に配布いたします。よろしくお願いいたします。

I Q-Uテストについて

1 Q-Uテストの活用状況

「Q-U」は近年、日本の全都道府県の半数以上の県や市の教育センター、及び教育委員会で研修会が毎年実施されています。

佐賀市教育委員会では、平成20年度より市内全小学校で予算化して実施しています。

2 Q-U (Questionnaire-Utilities) の開発経緯

① 社会を含めた学校教育の課題から

○1980年代…中学、高校が荒れた時代と言われています。その頃の学校は、対処的生徒指導（注意や強い指導＝力）が主流だった時代と言えます。もちろん、学校教育で子供たちが間違いを犯したり、他人に迷惑をかけた場合などに正すことは大切であるため対処的生徒指導は重要な生徒指導の手法です。ただし、対処的生徒指導だけでは結局、真の問題解決にならず、問題を深く沈み込ませることになります。

○1990年代…平成3年から4年にかけて、山形県をはじめ地方でのいじめや自殺が続出しました。文部省（現：文部科学省）はいじめ防止月間を指示したり、教育相談システムの検討も指示したりしました。全国各地の教育現場からは、子供たちの日常観察の他に、子供を知るテストがほしいと要望が出てきた時代です。

○2000年以降…要因は多種多様であり特定できるものではありませんが「すぐキレる子ども」と社会で取り上げられた、「不注意」「多動性」「衝動性」と言われる子どもたちが教育現場でも認知されるようになりました。これらは、近年、時代の急速な変化とともにあらわれた子供というわけではありません。

○不登校等や子どもへの対応…不登校の児童生徒数は13万人（＝2年連続増、中学は34人に1人・文科省）のうち10万人が中学生です。この現状に際して、学校には、スクールカウンセラー、学習支援員、生活支援教員などが配置されるようになりました。不登校の児童、生徒数は3年連続で減少していますが、出現率で見ると顕著な変化はなく、実情は横ばいといえます。不登校の児童は、中学校でも不登校となる確率が高いといわれています。中学でも兆候は一年生で表れることが多く、こうした時期に「初期症状」を見逃さず、ケアに当たれば、効果は高いでしょう。学力不足の影響も無視できません。勉強についていけず不登校となる子は多いもので早い段階で最低限の基礎学力を身に付けさせることも有効な対策です。もちろん、不登校は「悪」ではありません。「防止」という考え方に違和感を覚える人もいますが違う分野で自分を輝かせられる子には、学校以外の選択肢が当然あっていいと考えられています。しかし、学校に行きたいのに、さまざまな理由で行けない状態になる子が多くいます。不登校になってからでは、救うのは困難で多くの努力も要します。事後対策の充実は重要ですが、抜本的な未然防止策への取り組みも必要となります。

以上のような教育現場の課題等から子供たちの日常観察（見取り）の他に、子供を知るテストがほしいと要望が教育現場から多く寄せられるようになりました。従来の心理テストはありますが、項目数が多く、教師が忙しい中でも使えるものを、という要望の元、Q-Uの開発が進められています。

② 「Q-U」が広く活用された理由

現在、多くの教育機関で活用されている理由は次の通りです。Q-Uを用いることによって、不登校にいたる可能性の高い児童生徒、いじめ被害を受けている可能性の高い児童生徒を早期に発見できます。同時に、学級集団の状態を分析することができ学級崩壊にいたる可能性が診断できる唯一の尺度だからです。

[学校現場で活用されている理由]

- ・児童生徒に短時間で実施できる
- ・児童生徒の自尊心やプライドを傷つけない質問内容である
- ・集計結果が図表化され結果を理解しやすい
- ・教師が「Q-U」の結果を活用する際にも、心理学の専門的な知識を必要とせず、日々の教育実践に活用しやすい
- ・学級集団の全体像を把握することができ、校内研修などで教師同士が学級経営について検討する際の資料として活用しやすい。

つまり、目の前にいる子供たち一人一人が持っている潜在的、顕在的な良さや長所を伸ばすためには、早いうちに見通しを立てることが求められます。これからの学校教育は、良さや長所を伸ばしながら自己実現を支援していくことが大切とされています。このことから、教育現場には非常に有用性があると認知されていることが分かります。

3 「Q-U」とはどのようなものか

① 「Q-U」の構成

「Q-U」は2つの心理検査から構成されています。

「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」

この2つの心理検査から教師は子どもたち1人ひとりについての理解と対応方法、学級集団の状態と今後の学級経営の方針をつかむことができます。

② 「Q-U」は標準化された心理検査

「Q-U」は発行前に総計3万人の児童・生徒を対象に事前検証を行っており、その結果日本テストスタンダード委員会の審査基準を満たした標準化された心理検査として認定を受けています。標準化されているとは、心理検査の内容が妥当であり、また、実施のたびに結果が大きくぶれない信頼性があることが、事前に検証されているということです。検査結果を判定する基準が統計的に明らかにされ、信頼性と妥当性が保証されているため、公的な資料としても活用することができます。

※ 理論的背景となること

	<p>第五段階として「自己実現」の欲求。自己の能力、可能性を發揮したり、創造的活動や自己の成長を希求したりしようとする。自分らしく生きたい、真なるもの、善なるもの、美なるものを求め、人の役に立ちたいと願い、社会的自己実現を図ろうとする心情。</p> <p>第四段階は「承認」（自我・自尊）欲求。自分が周囲から価値ある存在として認められ（褒められ）、尊敬されることを求める欲求。この欲求も上記と同じ理由で思春期に特に強くなります。学級の中で自分は認められている、必要とされているという思いを求めている。学習活動で活躍の場が得られない児童生徒は外の場面でこの欲求が満たされるような配慮が必要。</p> <p>第三段階は「所属欲求」。集団に帰属し、仲間として受け入れられたい、他人と関係をもちたいという欲求。仲間がほしい、愛されたいという欲求。小学校高学年から中学・高校にかけて、思春期に入ると親からの自立が発達課題として表れる。第二次反抗期で親を否定するが、まだ一人では立てないので仲間を必要とする。だから、クラスで無視されるようなことは非常に辛い。仲間からの「シカト（無視）」よりは「パシリ」を選択する。共感的人間関係が形成された学級づくりが必要。</p> <p>第二段階は「安全欲求」。自分の存在や生活上安全や安定を求める欲求。死んだり、怪我したりしたくないという欲求。いじめや虐待を受けていれば、勉強など自己実現の欲求はわからない。</p> <p>第一段階は「生存欲求」。食欲、睡眠欲など生命を維持するための欲求が満たされた時に次の欲求にうつる。</p>
--	--

③ 「Q-U」でがわかること

子ども個人と、学級集団の情報から、不登校、いじめ、学級崩壊などの問題に対応するデータが得られます。

- ・不登校になる可能性の高い子どもはいないか
- ・いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか
- ・各領域で意欲が低下している子どもはいないか
- ・学級崩壊に至る可能性はないか
- ・学級集団の雰囲気はどうか

以上のような、情報が得られます。つまり、現在学校現場で深刻な問題となっている不登校問題、いじめ問題、学級崩壊の問題に対応するデータが得られるのです。

④ 「Q-U」は具体的にどのような目的で使用されるのか？

代表的には、以下の4つです。 1. 不登校の予防として 2. いじめの早期発見、予防として 3. 学級崩壊の予防として 4. 教育実践の効果測定に

⑤ 実施の方法・結果の採点集計方法

実施は10分から15分で完了します。朝や帰りの会などの時間を用いて実施できます。集計はコンピュータによる詳細な分析・集計が得られます。（採点処理期間は1週間程）また、先生による手採点集計も可能です。結果を理解するのに、心理学的な専門知識は必要としません。結果は図表化されますので全体のイメージからつかみやすく工夫されています。

⑥ 具体的にQ-U結果の例を見る

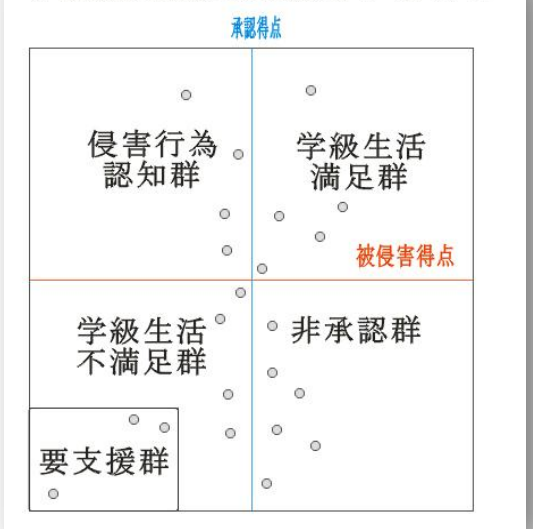
右下図（学級満足度尺度結果のまとめ）は、学級満足度尺度の結果をまとめたデータのイメージ図です。具体的には下記の図は、座標となっています。横軸が（ここでは赤線）被侵害得点、縦軸（ここでは水色の縦線）が承認得点を表しています。アンケートを採点集計し、児童・生徒ひとりひとりについてこの座標の該当する箇所出席番

号かもしくは名前をプロットしていきます（下記では、グレーの○印で示しています）。クラスの全ての児童・生徒のプロットが完了したら、個々の児童・生徒が、どのカテゴリにプロットされたかを確認します。縦軸は、承認得点で「j」自分の存在や行動がクラスの仲間や教師から承認されている」という感じている度合いを示しており、軸が上へいくほど、その度合いが強い（承認されているという自覚が強い）こととなります。横軸は、被侵害得点で、クラスへの不適応感やいじめ、冷やかしなどを受けていると感じている度合いを示しています。軸が左へいけばいくほどその自覚が強いこととなります。

上記の集計表から、児童・生徒個々人の状況を把握します。それぞれのカテゴリの簡単な説明は下記の通りです。

<p><学級生活満足群> 学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童・生徒</p> <p><非承認群> いじめや悪ふざけを受けてはいないが、学級内で認められることが少ない児童・生徒</p> <p><侵害行為認知群> 他の児童となんらかのトラブルがある可能性が高い児童・生徒</p> <p><学級生活不満足群> 耐えられないいじめや悪ふざけをうけているか、非常に不安傾向が強い児童・生徒。特に要支援群の児童・生徒はその傾向がさらに強く早急な支援が必要。個々人についての確認と共に、クラス全体としての傾向を、上記プロットの分布傾向からつかみます。分布パターンについては様々ですが、特に代表的なパターンとしては、「右上に集まった分布」「縦に伸びた分布」「横に伸びた分布」「斜めに伸びた分布」「拡散」などです。クラス傾向や、今後のクラスの雰囲気推移が予測できます。学級崩壊の早期予防・対策などに効果的です。</p>
--

学級満足度尺度結果のまとめ



II 東与賀中学校の学校づくりと「Q-U」の機能的有用性

1 学校教育目標「心豊かで、たくましく生きる生徒の育成」について

「心豊か」とは、一人ひとりが学齢に応じた自己実現に向かうために様々な学習に対して主体的に取り組んだり、先人の功績や地域の伝統などを大切にしたりしながら人との関わりの中で知識や見識、及び良心を育み成長していくことです。その「心豊か」を一人ひとりに育むことで社会の変化にも柔軟に対応しながら社会に貢献できる「たくましさ」を備えた生徒を育てるという意味を含んでいます。この学校教育目標に迫るために「楽しい学校（夢を語る学校、夢を語る学校、心地よさであふれた学校）」という学校経営方針を打ち立てています。さらに、本学校経営方針に迫るために本年度の教育の重点目標を設定しています。

<p>(1) 生徒指導の充実と強化 積極的な生徒指導←教育相談の充実/生徒指導協議会の充実/スクールカウンセラー、サポート相談員/学習支援員との連携</p> <p>(2) 学習指導の充実・自ら学ぶ意欲の育成 学ぶ楽しさあふれる教室 ← 『学び合い』を取り入れた指導法改善 →楽しくわかる授業・学ぶことの楽しさ →本物との出会い（芸術教科等）</p> <p>(3) 道徳教育の充実 地域教材を開発したり、地域人のゲストティーチャーを仕組んだりしながら、これまでの道徳を深め広げる手だてを仕組む。</p> <p>(4) 生徒会活動の充実 校内外の活動に出番・役割・承認のシステムを構築し、地域が応援できる開かれた学校づくりの屋台骨となる生徒会活動を開発的に仕組みながら充実させていきたい。</p> <p>(5) 特別支援教育の充実 個々の生徒の実態に応じた支援を仕組む。</p> <p>(6) 人権・同和教育の徹底 佐賀市の取り組みでもある「命・いじめを考える日」を学校内でも充実させていきたい。そのために、身近な人からの話や、生徒会活動「いじめ撲滅運動!」を人権・同和教育の視点に価値づけしながら一人ひとりの生徒が自分を見つめたり、周囲の心情を感じたりすることができる「心豊かさ」を育みたい。</p> <p>(7) 教育環境の整備 「割れた窓ガラス理論」を日々実践できる学校集団を構築したいと考える。小さな窓ガラスを割れたままにしておくと、個々では何でも許されるという信号を送り、そして地域全体が荒れる。そこで、小さな落書き、はり紙でも近隣の方が声をかけあって直すということを繰り返す。そうすることによって改善される、という意味を理解実践できるように働きかける。</p> <p>(8) 体験的な活動の重視 SLタイム（総合的な学習の時間）キャリア学習を開発的に進め、達成感や成就感を一人ひとりが持つことが持つことができるように構成する。</p> <p>(9) その他 食育や防煙教育、情報リテラシーなどこれからの時代をたくましく生き抜く体力と知力と精神力を一ひとりの実態に応じて身につけることができる教育を構築していきたいと考える。 合わせて、市民性を育み教育の実践、及びまなざし運動の実践の視点からも学校の教育活動内に地域や小学校との連携を広く設定し、学校、家庭、地域がそれぞれで育てるのではなく、連携の中で開発的に育てることを踏まえた学校づくりを進めていきたい。</p>

2 「Q-U」の機能的有用性

義務教育は9年間ですが、中学校生活は3年間しかありません。しかも思春期という人の成長の中では大変重要な時期です。心身ともに大きく成長しながらも「揺らぐ成長期」である思春期ですが、義務教育の後半である中学校時代だからこそ立派な大人の基礎を身につけさせたいと願うのは学校だけではありません。近年、学校教育では「幼保小中連携」が重視されるようになり、特に「幼保と小」「小と中」の連携を深めるよう様々な取り組みがなされています。これは、「小一プロブレム」や「中一ギャップ」「中二ギャップ」を減少させたいという願いと、幼保小中の10数年間の教育が連携または一貫することでより効果的な教育を施すことができるという視点に立っています。しかしながら、やはり学齢に応じた育ち方や年度内で取り組む教育活動は決まっておき、その中で誰一人と遅れることなく仲間と一緒に安心して安全な環境の中で学習する喜びを保障しながら伸びてほしいと考えています。

そうすると、一人ひとりにおける一年12か月の教育活動が効果的に進められていくことが望ましくなります。生徒一人ひとりはその個性の中で自己の良さを伸ばそうとします。しかし、その環境の中でうまく人間関係が築けなかったり、誤解を受けたりするとその効果は妨げられます。「それも勉強」という考え方もあり、その方が終盤効率を上げることもあります。ただし、それは、大人がしっかり身取って見守りながらの環境下と言えるでしょう。急速な変化を遂げる現在社会ではそれもかなわぬことが多いと考えられます。私たち大人はみな、すべての子どもを「心豊かにたくましく生きる力を育み」たいと考えています。

このように、少なくとも9年間の系統的な育みの中での中学校3年間、その中の一年一年を大切にしたいと考え教育活動を仕組むためには、生徒一人ひとりの内面に混在する課題や問題を早期に発見し解決に向かうための手だてを仕組まなければなりません。また、そうでない生徒にもさらに伸びる手だてを仕組みたいものです。そのような教育理念の中で科学的根拠に基づくデータを活用して一人ひとりの実態に合う教育活動を仕組むことができれば、生徒一人ひとりを学校の教育目標や社会、家庭の願いに迫ることができるのでは考えます。

3 「Q-U」の具体的な活用方法

研究部を中心に「Q-U」について平成21年度は下表のように計画立案している。

月	校内研究との連動	備考
4	各教科における『学び合い』の年間計画立案と学級経営方針の計画 ※一人ひとりの観察と教科担任、部活動顧問等との報連相、及び家庭訪問等から情報収集による実態把握	○ 必要に応じて、家庭を連絡しながら教育活動に生かすようにする。
5	修学旅行他での活動を身取りながら関係職員等との報連相による把握 ※「Q-U」の分析による裏付けと課題発見、及び手立ての仕組み	
6	学校生活日常での観察と一人ひとりの実態に応じた手立ての仕組み	
	↓ ← 各月の校内研で「Q-U」データを参考にした生徒の支援体制を協議する	
2	※第二回「Q-U」による比較検討	
3	次年度への引き継ぎ	

4 「Q-U」の今後の活用について

学校としては、予算化できるように佐賀市へ働きかけをしたい。しかし、予算化が期待できない場合を想定してPTA会費に予算計上をお願いしたいと考えている。回数は年間2回（5月下旬、3学期）を予定したい。